

高見順的南洋作品探究 ——以與《高見順日記》的比較為探討中心（II）——

洪瑟君*

摘要

日本近代的南方風潮中，許多作家、文人前往南方並留下大量與南方相關的作品及紀錄。作家高見順也是其中之一。他在昭和十年代曾有兩次前往南洋的經驗，第一次是在昭和十一年的一月至五月，與友人三雲祥之助同行前往當時的荷屬東印度旅遊，另一次是昭和十六年十二月至十八年一月，以徵用作家的身份被派遣至緬甸，經歷一年多的隨軍生活。以此次的隨軍派遣為契機，高見順再次開始撰寫在第一次的南洋行之後因回到內地而一度中斷的日記，同時，藉由這段隨軍的南洋體驗，高見順也寫下《緬甸記》、《緬甸雜記》、《緬甸的印象》等大量的作品。

本文將以高見順的徵用期作品為探討對象，配合當時的時代背景並對照高見順於同時期所撰寫的日記，探討高見順在其徵用期作品裡所呈現出的南方言說及其意義。

關鍵詞：高見順、《高見順日記》、徵用作家、緬甸

* 台灣大學日本語文學系助理教授

Exploration of Jyun Takami's Southern Works --- Comparison With *Jyun Takami's Dairies* (2)---

Hung, Se-Chun *

Abstract

In Japan's modern history of the Southern trend, many writers and scholars headed to the South and left lots of works and records associated with the South. Writer Jyun Takami was one of them. He had two trips to the Southeast Asia in the Showa generation, the first trip to Dutch East Indies with his friend Syounosuke Mikumo from January to May, the 16th year of the Showa Generation. The second trip was to Myanmar for 1 years of military life as a dispatched writer from December, the 16th year to January, the 18th year of Showa Generation. During the period of conscription, Jyun Takami wrote lots of works such as “*Burma Note*”, “*Miscellaneous Notes of Burma*”, and “*the Impression of Burma*”.

Using Takami's associated works which were written during the period of conscription as the discussion topic, this paper, on the back of the prevailing era, will compare Takami's published works with his private diaries and analyze the discourse about the South in his works.

Keywords : Jyun Takami, *JyunTakami's Diaries*, dispatched writer,
Burma (Myanmar)

* Assistant Professor, Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

高見順の南洋作品探究 ——『高見順日記』との比較を中心に（Ⅱ）——

洪瑟君*

要旨

作家高見順(1907-1965)は、日本近代の南方ブームの中で南洋へ向けて旅立ち、そして南洋に関する作品を数多く書いた作家である。彼は昭和十年代に海を渡って南洋へ行った経験を二度も有している。一度目は昭和16年の1月から5月まで、画家の友人三雲祥之助と共に、当時のオランダ領東インド（蘭印）への旅であり、二度目は昭和16年12月から18年1月まで、徴用作家としてビルマ（現在のミャンマー）に派遣された一年余りの従軍体験であった。その南洋徴用体験に基づいて、『ビルマ記』や「ビルマの印象」などビルマに関する作品を数多く描いた。また、その徴用生活をきっかけとして、「渡南遊記」の後に一時的に中断された日記も、入隊直前から再開された。

二度目の南洋体験で、徴用作家としてビルマに派遣された高見順は、ビルマに関する作品の中でどのような描き方で南洋を描写したのか。本稿は、高見順のビルマに関する作品を中心に、作家の日記を参照しながら、徴用作家としての高見順の作品における南洋言説を探究したい。

キーワード：高見順、『高見順日記』、徴用作家、ビルマ

* 台湾大学日本語文学科助理教授

高見順の南洋作品探究 ——『高見順日記』との比較を中心に（Ⅱ）——

洪瑟君

一、はじめに

作家高見順(1907-1965)は、日本近代の南方ブームの中で南洋へ向けて旅立ち、そして南洋に関する作品を数多く書いた作家である。彼は昭和十年代に海を渡って南洋へ行った経験を二度も有している。一度目は昭和16年の1月から5月まで、画家の友人三雲祥之助と共に、当時のオランダ領東インド（蘭印）への旅であり、二度目は昭和16年12月から18年1月まで、徴用作家としてビルマ（現在のミャンマー）に派遣された一年余りの従軍体験であった。一度目の蘭印旅行の後、高見順は蘭印で自らの目で見た蘭印の風物や当時の蘭印の状況を「蘭印の印象」や「蘭印点描」などの文章に書いた。そして、二度目の南洋徴用体験によって、『ビルマ記』や「ビルマの印象」などビルマに関する作品を描いた。高見順の南洋作品について、小林敦子は蘭印旅行、ビルマ従軍などのアジア体験を元にした紀行文は、「東南・南アジアの文化、自然を多岐に渡って細やかに観察したものであり、高見が積極的に、出会ったアジアの世界に関心を寄せたことがうかがえる」¹と論じている一方、小田切進は高見順のビルマに関する作品に対し、「日華事変から太平洋戦争へかけて、文学者によるおびただしい量の従軍記録が発表されたが、ビルマについての高見順の記録のようなユニークなものは、恐らく他にまったく類のないものといっている」²と評している。

高見順の南洋作品は、大方彼の日記に基づいて描かれたものである。一度目の蘭印旅行において、高見順は単に一人の旅行者として、

¹ 小林敦子「戦争と文学」『生としての文学——高見順論』、笠間書院、2010年、pp.109-110。

² 小田切進「解説」『高見順全集』第19巻、勁草書房、1974年、p.767。

旅人の目を通して当地の風物を観察・記録した。しかし、当時公開出版された蘭印に関する作品を同じ時期に書かれた高見順の日記「渡南遊記」と対照した結果、日記を基にして描かれた作品には明らかに高見のある特定な意図を強調しようとする傾向が見られる³。それは当時の時勢の下、作家自身も国中に高く掲げられてる「大東亜共栄圏」という意識に影響され、自然に生み出された結果と考えられる。それでは、二度目の南洋体験で、徴用作家としてビルマに派遣された高見順は、ビルマに関する作品の中でまた、どのような描き方で南洋を描写しているのか。本稿は、高見順のビルマに関する作品を中心に、作家の日記を参照しながら、徴用作家としての高見順の作品における南洋言説を探究したい。

二、徴用作家としての従軍生活

昭和 16 年 10 月から、日本軍政府によって施行された「国民徴用令」が文学者に適用されるようになり、陸軍省では、南洋の戦地において報道宣伝事業に従事する要員を募集し始めた。作家だけではなく、画家、漫画家、映画人、放送関係、新聞記者、演劇人など数多くの文化人が徴用され、宣伝部隊として戦地に派遣され、当地でいわゆる「文化工作」⁴を実行する。同年 11 月 17 日に、高見順は当時「白紙」と俗称されている文化人徴用令状を受け取り、第一次徴用された徴用作家になった。身体検査に合格した後、彼は直ちに居住地の東京を離れ、大阪にある中部軍司令部に出向く。そして、12 月 2 日に大阪の天保山港より出航し、一年余りの外地徴用生活を始めた。その徴用生活をきっかけとして、「渡南遊記」の後に一時的に中断された日記も、入隊直前から再開された⁵。

³ 拙論「高見順の南洋作品探究——『高見順日記』との比較を中心に（I）」をご参照ください。（『台大日本語文研究』28、2014 年 12 月）

⁴ 当時の文化工作は大きく三つに分けられる。一つ目是对占領地宣伝といい、日本語の普及が中心である。二つ目は、対軍隊宣伝であり、日本の軍人を対象とし、戦意高揚と聖戦思想の普及が目的である。三つ目是对敵宣伝であり、対敵放送の原稿作成などを目的とする。（神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家 戦争と文学』、世界思想社、1996 年、pp.6-12）

⁵ 高見順の日記は昭和 16 年 7 月 20 日から中断され、昭和 16 年 11 月 22 日に

12月18日に、高見順は軍隊と共にベトナムのサイゴン（現在のホーチミン市）に着き、現地で軍用トラックに乗り換え、一路タイに向かった。29日にバンコクに到着し、高見はそこで陸軍報道班の「資料蒐集班」に編入され、軍隊と共に昭和16年の大晦日を迎えた。17年年始、陸軍報道班員として、高見は前線部隊と共にバンコクから出発した。まずはビルマの南部にある要衝のヴィクトリア・ポイントに着き、そしてタイとビルマの国境にある山岳地帯を越え、ビルマのラングーンに入った。4月の下旬、高見順は軍隊と共に北上して、マンダレー攻略作戦に参加した。そして5月2日に日本軍がマンダレーに入り、一日にマンダレーを占領した後、高見は前線での責務を既に遂行したため、6月の中旬にマンダレーを去り、再びラングーンに戻った。ラングーンに戻ってから、彼は戦史編纂、映画検閲などの仕事をしており、昭和17年の年末に内地に帰還するまで宣伝班員の任務を果たした⁶。

一年余りの徴用体験を通して、高見順は徴用期間中とその帰還後、ビルマに関する作品を数多く書いた。それらの作品は戦争期に続々と当時の新聞・雑誌に発表され、一部が昭和19年2月に単行本『ビルマ記』（協力出版社）に収録されている。一方、「書き魔」と称された作家の性質を発揮し、高見順は徴用期間中にも日記を書き続けていた。一部分の日記（昭和17年1月19日から8月14日まで）は作戦中戦場で失われて欠落したが⁷、残された日記は戦後『高見順日記』に収録され、高見の作品を分析する際の貴重な資料となっている。

再び開始された。

昭和16年7月20日日付の日記の追記によると、「渡南遊記」は蘭印での見聞を小説などに使う時のメモとして記されたもので、内地での日記はその点で自分にとって無意味なので中断した。また、保護観察所から監視されていた「要視察人」の身として、日記には自分の本心が書けない。その点で日記を書く意味も失ったので中断した。このように、内地で一旦中断されていた日記が、徴用令状を受け取った後、後日のためのメモとして、入隊直前から再開された。（『高見順日記』第1巻、勁草書房、1965年、pp.230-231）

⁶ 木村一信「高見順の『徴用』体験——『私はビルマを愛してゐる』」、同注4前掲書、p.35。

⁷ 『高見順日記』第1巻、勁草書房、1965年、p.323。

三、作品に表現されているビルマに関する言説

高見のビルマに関する作品は大概に二種類に分けられる。一つは高見が軍隊と共に行動し、実際に攻略作戦に参加した、つまり前線での体験によって描かれた現地報告類の文章である。それらの文章では、日本軍の移動ルートや対敵作戦の状況などの描写によって、文章全体の時間軸がはっきり提示されている。主に前線での任務が終わって再びラングーンに戻る以前の体験に基づいて書かれたものである。もう一つは高見がビルマに滞在している期間に自分の眼で観察し、自分の身で体験したものを全て混合して文字化した雑記類であり、文章全体の時間軸は明確に区別できない。高見順の実際の徴用体験と対照して見れば、それらの作品は17年の6月中旬にラングーンに戻って以後、宣伝班員として文化工作を行っている体験に基づいて書かれたものと考えられる。

(一) 現地報告

前述したように、現地報告類の文章は、高見順が17年の6月中旬に再びラングーンに戻る以前の体験を基にして書かれたものである。その時期に高見順は日本軍と共に行動し、作戦にも参加した。戦時の厳しい検閲制度の下で、徴用作家としての高見は国の方針に従って前線での戦況や戦場での見聞を文章にして、銃後に知らせなければならぬ。その時期に書いた日記は激戦で大半は戦場で失われ、僅かしか残されていないため、作品を日記と逐一对照して分析することはできない。しかし、残された徴用生活の日記を概観すれば、戦場での出来事より、高見がやはり現地で見た風物、当地住民の生活や伝統文化のほうに関心の眼を向けていると言えよう。それでは、高見順はどのように徴用作家の任務を果たした上で、自分が関心を持っている部分を作品の中に取り入れたのか。次に「現地報告」類の作品におけるビルマの風物、住民の生活、当地の伝統・民俗に対する描写を取り上げ、作品における南洋言説を分析したい。

1. ビルマの風物に対する描写——日本軍隊の辛さ

軍隊と共にビルマに向かっていく途中、高見順は南洋で見た植物

に強い好奇心を示している。作家の鋭い観察力を発揮し、日記において、彼は仏桑華、クンバン・カルチス⁸、ネム⁹、咲くと雨季があがると言われている白い花¹⁰、椰子¹¹、ひどい棘のはえた棕櫚様のもの¹²、ミモーザ¹³など、旅中に眼に映した様々な南洋植物を記録している。そのような植物への関心は作品「ビルマ戦場の草木」にも反映している。「ビルマ戦場の草木」では、彼は含羞草、棘、サボテン、しびれ芋、椰子、蘭など、ビルマで見かけた植物を紹介し、その植物の外観や実用性について詳しく描写している。しかし、「ビルマ戦場の草木」をよく読むと、この作品は作家自身の興味本位だけで描かれたものではないように思われる。一見ビルマでよく見られる植物を紹介しようとする文章であるが、作品の中に所々日本軍の辛さを強調する描写が現れている。

例えば、高見は文章の中で含羞草について言及している。南部ビルマを行軍中、野原の植物の中でもっとも自分の眼を惹いた含羞草は実に不思議な植物である。ちよつとでも触ると、すぐ葉を閉じて枝を垂らして死んだような振りをするため、路傍で含羞草を見ると、つい手で触ってみたいくなり、奇妙に悪戯心を起こしてしまう。しかし、その様態が可憐な、そしてまた愛嬌がある含羞草には意外に恐るべき棘があり、その鋭い棘に刺されると、含羞草に対する愛する気持ちが一遍に憎しみに変わったという描写である。この不思議な含羞草の特質に対して、高見順は次のように兵隊の行軍体験を通して表現する。

だが、ほんたうにクタクタに疲れたときは、そんなどころではなかつた。「小休止！」と声がかかると、いきなり道端に坐り込む。含羞草などにかまつてはゐられない。

さうしたある時のこと、疲れ切つた身体を含羞草の上にドタ

⁸ 12月19日日記、同注7前掲書、p.261。

⁹ 12月20日日記、同注7前掲書、p.261。

¹⁰ 1月3日日記、同注7前掲書、p.292。

¹¹ 1月5日日記、同注7前掲書、p.297。

¹² 1月6日日記、同注7前掲書、p.298。

¹³ 1月15日日記、同注7前掲書、p.316。

ンと投げた。すると、何かの棘がチクリと裸の腕をさした。これはいかんと、地面に手をやって身体をぶらさうとすると、その手にまた鋭利な棘が遠慮会釈なく突きささった。ひどい痛さに飛び上った。疲れ切つてゐるところで、さういふ苛酷な眼に会ふのは、無性に腹が立つものだ。一分でも大事な休止の時間に、それは全く悲しいくらゐ腹立しかつた。

どいつが刺したかと地面に睨みつけた。そこには、含羞草しか無かつた。¹⁴ (下線筆者)

棘に刺された兵士の生き生きとした反応を通し、含羞草の特質を完全に表現すると同時に、行軍中に毎日疲れており、休憩時間を一分でも大事しなければならないという日本軍の辛労をも完全に表現している。また、「棘」を描写する段落において、棘だらけの葉を夜具としても平気で寝ている兵士の姿を描き、兵士の苦労を読者に伝える。「サボテン」を描写する段落には、半分砂漠のような所に花が咲いていないため、サボテンを花代わりに戦死した僚友の墓に供えた描写がある。淡々と死を語ることによって、日本軍の勇ましさをより一層描き出す。更に、「しびれ芋」を描く段落では、兵士たちがしびれ芋の料理法を何度も繰り返して実験した後で、やむを得ずしびれ芋を食用に供することを諦めた時の落ち込んでいる気持ちを描き、日本軍が戦地で食糧不足の窮地に陥った状態を描出する。高見順は南洋の植物に対する関心を出発点として、ビルマの戦地で見た植物について描写する。一方、それらの植物を描写すると同時に、日本軍の日常生活における出来事を導入し、外地へ遠征する苦労も提示する。こうして、平凡な南洋風物の描写の一側面として、日本軍の辛労を強調しようとする深意が十分に読み取れるのである。

2. ビルマ人の生活様態に対する描写——英人への批判

「ヴィクトリア・ポイント見聞記」において、高見順はヴィクトリア・ポイントに着いたとき、自分の眼に映った景色を描いた。「丘の小綺麗な家々は、英国官憲の事務所、社宅といった類ひ、そして

¹⁴ 「ビルマ戦場の草木」、同注 2 前掲書、p.238。

波止場に面した商店街の裏に、土着民のみすぼらしい家がごちやごちやと並んである」¹⁵。このように、二、三行の景色描写のみで、支配側と被支配側の差別が明白に描き出されたのである。雲泥の差のような住環境のみならず、ビルマ人は日常生活の中でも差別的に扱われている。「マンダレーからラングーンへ」では、英人のビルマ人に対する優越感を描いている。

英国人の恐るべき優越感、そして又現実的にビルマ人に強ひてみた自らの優越的立場は、全くそんなことをしかねない程度のひどさだつたのだ。その傲慢不遜に関して、たとへばこんな話がある。ビルマ人のバザー商人のところへ来て、(多くは露天商人だつた。)英国兵がものを買ふときは、品物を、それと手で差したりはしないで、靴先で蹴るのが常だつたといふ——班長から聞いたのである。(中略)即ち、英国兵は前述のやうな態度だつたが、それにひきかへ日本兵は、——とビルマ人は言ふさうである。「自分たちを劣等視しないで友達扱ひをしてくれる。それが実に有難い」と。品物をちやんと手でさすのである。それから又値段が高ければ、日本兵は、まけろといふ。ところが英国兵は、勝手に自分で値切つた金を投げつけて、さつさと持つて行つて了ふ。これには泣かされたといふ。日本兵は値段が納得できなければ買はないだけである。¹⁶

同じくビルマ人が経営するバザーで買い物する場面であるが、英国兵と日本兵のビルマ人に対する態度は完全に異なっている。一方、普段は優越的立場に立ち、ビルマ人の前で常に傲慢な態度をとっている英国兵は、日本軍が来ると聞くと、「周章狼狽、船で逃げ出し」¹⁷てしまった。英国兵の卑怯な行為に対し、日本軍は現地に着いてから残された哀れなゴム園労働者を助け、「頼まれもせぬのに」¹⁸、ビルマ人のために堤防の修理工事をやる。英国兵と日本兵の言動と

¹⁵ 「ヴィクトリア・ポイント見聞記」、同注 2 前掲書、p.177。

¹⁶ 「マンダレーからラングーンへ」、同注 2 前掲書、p.263。

¹⁷ 「ヴィクトリア・ポイント見聞記」、同注 2 前掲書、p.178。

¹⁸ 「マンダレーからラングーンへ」、同注 2 前掲書、p.259。

態度を対照する手法で、作品の中で英人への不満と批判を表すと同時に、日本軍のビルマ人に対する堂々たる、しかも親愛に満ちた態度を特記しようとする意図も窺える。

このような当地住民の生活様態に対する描写の中で、もっとも興味深いのは高見の「犬」に対する描写である。徴用作家として軍隊と共に南洋の各地を移動する間、彼は至る所で南洋住民の日常生活に注目し、生活上の枝葉末節まで注意を払っている。16年12月22日の日記に、彼は

小心悪狗

木戸に上掲のような木札が出ていた

蘭印の *Awes Andjing* (註=犬に注意) と同じだ。¹⁹

と記して、カンボジアで見た当地の人々の生活様態を記録している。また、仏印とタイの国境を越える途中、「犬がたくさん。やたらと吠えている(カンボジヤには犬がすくなかった)。」²⁰と、そこで眼に映った南洋当地の生活様相を日記にまとめた。そして、「ヴィクトリア・ポイント見聞記」においても、高見は再び犬を焦点として、次のように描いた。

住民兵の宿舎と覚しいところに、一匹の痩せ衰へた犬が、氣息奄々の態で炎天下に横たはつてゐた。主の逃げたのを知らず、待つてゐるのであらうか。²¹

この部分は1月4日の日記に基づいて描かれたもので、日記における記述とほぼ同じである²²。空き家の外に横たわっている氣息奄々の犬の様子を通し、当地で眼に入った寂れて荒れたる現状を生々しく読者に伝えると同時に、英人に置き去りにされて、やむを得ず宿舎を離れて山に隠れる住民兵の哀れさを暗示している。

¹⁹ 16年12月22日日記、同注7前掲書、p.265。

²⁰ 16年12月28日日記、同注7前掲書、p.278。

²¹ 「ヴィクトリア・ポイント見聞記」、同注2前掲書、p.178。

²² 1月4日の日記において、「犬が一匹、兵舎の入口にうずくまっている。飛行場の兵士が飼っていたものであろう。主人に取りのこされた犬は、主人の帰りを忠実に待つて炎天下の入口でうずくまっているのだ。食料もないのだろう。すでに弱って息たえだえの有様に見えた。」と記している。(同注7前掲書、p.294。)

一方、高見は作品「マンダレーからラングーンへ」で、英人がマンダレーから追放されたため、街では英人が全く姿を消した現状を描いている。そのことと関連して、高見は昔のマンダレーのことが書いてあった本を思い出し、その本にある面白い部分を節録して自分の作品に入れた。

(前略) 然し、外国人に無礼な少年、そしてまた大人さへ、マンダレーの犬や豚にくらべたら問題ではない。全て東洋の犬は白人に対する気遣ひ沙汰の嫌悪を持つてゐるが、就中、ビルマの犬はひどい。隠れ家から突然襲いかかつてきて、通行中の英国人の踵に野蛮な示威を試みるのだが、そのひどさには、いかな沈着な人物でも平静を失はないであることが、(威厳はもとよりだが) 困難である。(中略) 駐割官次席の故バーブ氏は嘗つて街を歩いてみて犬に襲はれたので、杖を振つて一撃の下で殺して了つた。すると立ちどころに恐るべき騒ぎがおこつた。驚いて駐割館に戻つたが、ずつと暴徒が追ひかけてきて、わいわい喚きちらす、悪口雑言を浴びかける、竹の棒を振り廻すといふ騒ぎだつた。²³

スコットという英人の記述から、高見が特にその段落を引用したのは、ビルマ人の英人嫌いを強調するためだけではない。犬や豚に例えてビルマ人を見下した態度や、ビルマ人の習慣を理解しようとしなない英人の姿勢もその引用文を通して窺える。更に、仏教の国ビルマで、犬を打ったりすると自らトラブルを招くことになるという記述を通し、ビルマ人の生活様態を読者に伝えようとする作者の意図も読み取れるのである。

3. ビルマ当地の伝統・民俗に対する描写——日緬親善

「ラングーン通信」において、高見順はビルマで当地の新年を迎えたことを描いている。当地の風習によると、ビルマ人は新年の期間に「水祭(ティンヂェン)」を行い、お互いに水を掛け合つて正月を祝う。高見は当地の風俗習慣に惹かれて、作品の中で「水祭」と

²³ 「マンダレーからラングーンへ」、同注2前掲書、p.258。

「火祭」などの伝統行事に力を入れて説明し、更に幾冊もの参考書を引用して自分の論点を裏付けている。作品の中で高見は「水祭」と「火祭」の起源に遡りながら、ビルマの宗教信仰と仏教が伝来以前のナット崇拝（精霊崇拝）に言及し、当時のビルマではその伝統的なナット崇拝が人々に受け入れられ、ビルマ人の日常生活に深く根付いていると論じている。「歴史映画には、かならずナットがあらわれる。ビルマ人と精霊崇拝との関係を知ることができて興味深い。」²⁴と高見の日記に記されているように、ビルマ人のナット信仰の深さは、よく当地の映画にも反映されている。

「ラングーン通信」を執筆する時、高見順はまだ前線におり、それほど多くのビルマ映画を見るわけにはいかなかったはずである。しかし、嘗て蘭印で当地のナット信仰と接触し、蘭印の伝統文化や信仰に興味を持っていた高見には、勿論ビルマ人のナット崇拝にも興味が湧いていたに違いない。こうして、現地報告類の作品「ラングーン通信」では、高見順は自分の関心を引くビルマの伝統文化や信仰を作品に導入するため、宣伝班員の一人が正月に道でビルマ人に水をかけられたことから「水祭」についての話を展開した。そして、最初に水をかけられたことがビルマ人の何かの敵意から出た仕業と思っただけで驚いた高見はその後、

ビルマ人が日本人に水をかけたのは、敵意どころかその反対の親愛のあらはれなのだった。親愛といふ以上に、日本軍に幸あれと祈るビルマ人の真摯な心のあらはれなのだ。²⁵

と、水を互いに掛け合って正月を祝うという「水祭」の伝統を説明しながら、ビルマ人が日本軍の到来を歓迎し、更に日本軍に対する積極的に協力する様子を提示している。

一方、作品の中でビルマ人のナット崇拝を論じる際に、高見は次のような興味深い新聞記事を利用した。

現在のところビルマ語新聞で出てゐるのは「ニュー・ライト・

²⁴ 8月29日日記、同注7前掲書、p.376。

²⁵ 「ラングーン通信」、同注2前掲書、p.210。

オヴ・パーマ」(ビルマの新しい光)と「サン」(太陽)の二つだが、その「サン」の四月十三日の新聞に「日本軍司令官へのアピール」といふのが掲げてあつた。その要旨は簡単に言ふと、——マンダレー戦線の非占領地域で支那軍が恐ろしい掠奪をしてゐる。ビルマの住民はために飢ゑに瀕してゐる。一日も早くかかる支那軍を日本軍の手によつて撃滅して貰ひたいが、さうした地帯を日本軍が占領の暁は、ビルマの貧民にどうか糧秣を分け与へてやつて頂けないか。かかる場合は「ナット」も天上にあつてそれを見て、挙げて日本軍に力をかすであらう云々。²⁶

この記事の内容を字面通りに解釈すれば、ビルマの人々が全て日本軍の勝利を祈っており、神力を持つナットさえも日本軍に味方しているということを述べている。肝心な「ナット信仰」に言及すると同時に、この記事が日緬親善の証拠として対敵宣伝に使える価値もあり、日本軍の立場から見れば好都合の記述になっている。それ故、高見順は徴用作家としての任務を配慮した上で、その記事を取り入れたのであろう。また、その新聞記事の引用によつて、「ナット」は無知蒙昧な民衆だけが信仰しているものではなく、新聞など知識人が接触するメディアでも堂々と報道されているものであると、ナット信仰が既にビルマ社会に定着していることを説明した。

(二) 雑記

「ビルマの美人」において、高見順はビルマの青年作家とパゴダの参詣に行った帰りに、カレーうどんを食べに行った経験を描いている。青年作家の学生時代の話に興味がかかれ、店の看板娘に好奇心を持ち、多大な期待を抱いてその噂の美人を見に行つた。しかし、行って見ると、十年前の美人がもはや皺くちやな婆さんになってしまった故、期待が外れて落胆したという描写である。高見順の日記と対照してみると、この文章は17年9月24日の日記を基にして書かれたものが分かつた。その日の日記によると、高見順はビルマの青年作家ウー・サン・モン君とウー・ラー君、日本人の友達の豊田

²⁶ 「ラングーン通信」、同注2前掲書、p.219。

君、清水君一行と一緒にシウエ・ダゴン・パゴダへ参詣に行った。日記では、高見順はパゴダの参拝する方法やパゴダの前にいる獅子像の由来など、長い文章でビルマの伝統文化について詳細に描写している。それに対して、店の看板娘に対する記述は次のような一段落しか見えない。

我々はそれから裏の階段（入口は四つあった）をすこし降りたところにある「茶店」へ行った。ウー・ラー君が「この女主人は、今はもう年をとってしまったが、以前は美しく、学生の中に大変人気があった人です」という。見ると、実際はそう年をとっているのではないらしいが（ビルマ人はすぐ老けるのである）老けた感じで、以前そう人気のあった美人とはおもわれぬ。昔の倂まるで感じられない女だった。²⁷

「ビルマの美人」という作品の前半は、明らかに日記における店の女主人をモデルとして描かれたものである。日記の中で提起された「実際の年齢より老けた感じの女主人」に対して、作品の中で「ビルマの女性は、二十を過ぎると、急速度に老けるのだった。早く花が咲き、早く散るのである。これはビルマだけのことではなく、南方民族に共通のことだ」²⁸と論じ、客観的にビルマの女性について評している。しかし、その後の文章では、高見順は何故か意図的であるように焦点を変えて次のように述懐している。

私は、莫蔭にあぐらをかいた時から、暗鬱な気持ちに襲はれてゐた。といふのは――。街には英人相手のレストランだった豪華な店あつた。英人の学生はそこで飲をつくし、そしてビルマの学生はこんな汚い店で、悲しい青春の夢を描いてゐたのか。さうおもふと、英人に支配されてゐるビルマ人の哀れさが犇々と来た。ビルマ文学が、また貧しい悲しいものだった。

黴くちやの看板娘に対する驚きは驚きとして、いつか私の心は、このビルマ人たちを仕合はせにしてやらねばならぬといふ

²⁷ 同注 7 前掲書、p.434。

²⁸ 「ビルマの美人」、同注 2 前掲書、p.295。

想ひでいっぱいになつた。²⁹

日記の中に、パゴダの入口にいる美しい花売娘たちを見に行ったり、店の看板娘を見に行ったりしたとウー・ラー君が自分の学生時代を語ったことを記している。美しい少女に憧れているビルマ青年の多彩な青春の夢は、高見順の作品においては一変して「悲しい青春の夢」に描かれている。ビルマの女性を主題として描いた作品である一方、やはり英人に支配されているビルマ人の悲哀やビルマ人を幸せにしてやらなければならないといった決まった文句で文章を綴っている。高見順は雑記類の作品において、ビルマ人の服装、髪型、民族性などに着目しているが、ビルマに対する様々な印象をめぐって論じる際に、依然として特定の言葉を使って文章を書くのである。

四、結び

神谷忠孝の分析によると、徴用作家が書いた報告、小説及び評論の内容は、凡そ下記のような四種類に分けられる。

- 1、大東亜共栄圏をまともに信じて表現するもの。
- 2、情報や伝聞による先入観を現地で確認しているもの。
- 3、現地の人と積極的に接触して先入観を訂正して正確さを出すもの。
- 4、自己の感性をたよりに心に触れたことを書くもの。³⁰

そのうち、1、2は御用文学の範疇であり、即ち前線に派遣された徴用作家として、果たさなければならない使命である。ビルマに関する作品を昭和19年に単行本『ビルマ記』に収録して出版する際に、高見順は「後書き」の中に次のように記している。

この一卷は私が陸軍報道班員を命ぜられてビルマ作戦に従軍いたしました時、現地に於いて書きました所の前線報告的文章と帰還後数ヶ月（ビルマ独立宣言前）求められる儘にあれこれ

²⁹ 「ビルマの美人」同注2前掲書、pp.295-296。

³⁰ 「序論」、同注4前掲書、p.13。

の新聞雑誌に書きました所のビルマに関する印象記的雑文とを集輯したものであります。

現地通信は報道班員といふ公けの任務を持つた私の文章であります、その点、私の文章とはいふもののいはば私物ではないのでありますが、ここにそれらを全部まとめて本にして置きたいといふ私的な希望に対して快く許可を与へて下さつた大本営報道部に厚く感謝する次第であります。³¹

(中略)

続いてマンダレー王城などの印象も書いて置かうと思ひ、書きかけて中絶しました。今から思ふと、なまなましい記録をもつと書いて置けばよかつたと悔まれるのですが、原稿執筆が任務ではなかつたせみもあり、肉体の条件から言つても、これだけで精一杯の仕事でした。³² (下線筆者)

引用文の下線部が示したように、徴用期間に宣伝班員として公の任務が与えられたため、ビルマに関する文章は自分の手によって書かれたものと言っても、やはり個人的に所有される私物とは言えない。それ故、それらの文章を単行本に収録して出版する際、所有権を有する陸軍大本営報道部に許可を求めなければならない。更に、それらの文章を書く際に、当地の風土人物に対してより深く描こうとしても、「原稿執筆」、つまり自分なりの文学作品を書くのは徴用作家としての任務ではなかつたため、それらの文章をより深化させて文学作品とすることもできない。このように、徴用作家としての高見順は当時言うまでもなく、種々の方面に配慮した上で文章を書き続けたに違いない。与えられた任務を果たすために、文章の中で自分の関心の的となった当地の伝統文化や風土人情について触れようとしても、国の政策に応じる政治的な言説を利用して導入せざるを得ない。それ故、高見順のビルマに関する作品において、当地の風物描写にせよ、ビルマ人の生活様態に関する描写にせよ、ビルマ

³¹ 「解題」、同注 2 前掲書、pp.780-781。

³² 「解題」、同注 2 前掲書、p.782。

の伝統文化をめぐる描写にせよ、全ての主題を展開するには、直接的な描写か間接的な引用などによって、国の方針に従う言説を文章に取り入れたのである。

一方、高見自身の話によると、日記をつける目的は、ただ将来の文学創作に些細な手がかりを残すためであり、出版するつもりは全くなかった。高見が直接作戦に参加して戦争を最も身近に感じる時期に書いた日記の大半は戦場で失われたため、その内容については断言できないが、徴用期間に書いた日記を概観してみれば、全体的にはビルマでの見聞が記録のように書かれた内容が多く、国策協力を唱えるような特定の表現が少ないと言えよう。高見は昭和 17 年 8 月 21 日の日記で、次のような興味深い感想を述べている。

「報道文は、やはり軍人出の作家のが立派で、そうでないのはダメだ」といった内地の雑誌の批評。——これだけならいいが、「立派なのは、彼（書き手）がやはり軍人だからである……」といったいい方をしている。心激する。

上田、火野などが、日記をダラダラ書いて発表している。これがたくましいというものなのだろうか。ダラダラ書いている最中、これでいいのかという反省がないのだろうか。

作家が「書く」ということは、ただ書けばいいということと大分ちがう。そしてそう書けるものではない。

田園正に蕪せんとす、内地に帰ってひと苦勞だとおもう。³³

（下線筆者）

昭和 17、18 年の頃には、国全体に異様な雰囲気漂っており、出版物の検閲が一層厳しくなり、文芸作品の発禁、削除が続出した。作家たちは文学の力によって国策に協力することが要求され、所謂国策文学を書かなければならない時期であった。その厳しい状況のなか、たとえ何も考えずにダラダラ書いた文章でも、書き手が軍人出身の作家であれば文壇で好評を博す。その奇妙な現象に対し、高見順は日記に憤懣をぶつける。そのような文壇の現状について、彼

³³ 同注 7 前掲書、p.348。

は陶淵明の「帰去来の辞」における「田園將に蕪せんとすなんぞ帰らざる」一句を引用し、「田園正に蕪せんとす」という句で当時日本内地の文壇の墮落、しかも衰退していく現状を暗喩した。

国策文学が主流になった文壇で、彼は「書く」とことと「ただ書けばいい」とこととは違うと主張し、「身は売っても芸は売らぬ」と決意した作家の姿勢を見せる。徴用作家としてビルマに在った時、高見順が文学の力で国策に協力したのか、あるいは抵抗したのかははっきりと断言することができない。また作品における国威宣揚や大東亜共栄圏の意識を唱えるなどの描写は高見順の本意によって描かれたのか否かも断定できない。しかし、戦時下、国の政策に逆らわない限り、高見は一人の作家として、「ただ書けばいい」という無責任な態度ではなく、「書く」という強固な意志で作家のやるべきことに力を尽くしていた。日記の中で明確に示されたビルマに対する旺盛な好奇心と関心は、高見の自分なりの「書く」とことによって、ビルマの自然風物や文化の諸相などの描写に転じて作品に取り入れられたのである。高見順のビルマに関する作品を通して、徴用文学の一側面が見られると同時に、作品の内面に隠されている作家の苦心も窺えると思われる。

一方、高見順は戦後も日記を書き続けている。戦後の日記において、高見は戦争や戦時下の作品についてどのように自省したのか、それらの分析と探究を今後の課題として研究し続けていきたい。

【付記】 本稿は 2015 年 12 月 16 日にシンガポール南洋工科大学人文社会学院・台湾大学文学院共催の「多元観照の下における 21 世紀人文学研究」国際シンポジウムにおける発表原稿を加筆・修正したものであり、行政院国家科学委員会の研究助成（助成番号 NSC 101-2410-H-002-183）による研究成果の一部である。なお、論文掲載にあたり、二名の査読者より貴重なご意見を賜り、深く御礼申し上げます。

テキスト

『高見順全集』第 19 卷、勁草書房、1974 年

『高見順日記』第 1 卷、勁草書房、1965 年

『高見順日記』第 2 卷、勁草書房、1966 年

参考文献

神谷忠孝・木村一信編(1996)『南方徴用作家—戦争と文学』、世界思想社

小林敦子 (2010)「戦争と文学」『生としての文学——高見順論』、笠間書院

洪瑟君 (2014)「高見順の南洋作品探究——『高見順日記』との比較を中心に (I)」、『台大日本語文研究』28

臺灣大學學術期刊資料庫